

記述問題における話し言葉の使用をどう指導するべきか

追手門学院大学文学部准教授 東口 昌央

前年度まで勤務していた複数の県立高校での
考查採点中に、口語表現を無意識に使ってしま
った解答にしばしば遭遇した。省略表現や

「ら」抜き言葉、接続語として「なので」を使
用するもの、間違った敬語表現など、減点項目
として生徒に提示し、記述問題に取り組む経験
を積みさせているうちに徐々に減少していくもの
だったので、解答の作り方に慣れていけば無く
なるのだと思い、特に意識することはなかった。

だが、昨年度「言語文化」の一学期期末考查
で出題した問題に対する誤答（しかも、かなり
多くの生徒が同じ誤答であった）に違和感を覚
え、少々考察する必要があると思う、（みなさ
まのご意見をいただけることを期待し）本稿を
まとめた次第である。

まず、その考查問題の本文は副教材から選ん
だ「伊曾保物語」の「狼と狐の事」で、空腹の
ために魚を分けてほしいと狐に頼んだ狼が、狐
に騙されて川の中で身動きが取れなくなり、人
間に打擲されるという内容であった。本稿に関
する問題文は、次の箇所である。

【本文】

狐申しけるは、「あな恐れ多し。わが余を
奉るべしや。籠を一つ持ち来らせ給へ。魚を
取りて参らせむ」と言ふ。狼ここかしこに駆
け廻つて、籠を取りてぞ来りける。狐教へけ
るやうは、「この籠を尾に付けて、川の真ん
中を泳がせ給へ。後より魚を追ひ入れむ」と
言ふ。

【現代語訳】

狐が申したことは、「なんと恐れ多いこ
とよ。私の食べ残しなど差し上げるべきでし
ようか（、いや差し上げるべきではない）。
籠を一つ持つていらつしやいませ。魚を捕つ
て差し上げよう」と言う。狼はそこかしこに
駆け廻つて、籠を見つけて戻つて来た。狐が
教えるには、「この籠を尾に付けて、川の真
ん中を泳ぎなさいませ。（私があなたの）後
ろから魚を追ひ入れよう」と言う。

文法事項については用言を教えただけで、ま
だ助動詞については教えていなかった。だが、
授業中に取り上げた文章でも意志の「む」は説
明をしていたので、傍線部を現代語訳にする問
いを出題した。問題集ではこの箇所に傍線は引
かれておらず、答え合わせをしただけで課題へ
の取り組みが終わるのではなく、解説を読んで
理解や知識を深める習慣を身につけてほしいと
いう思いもあり、授業で体系的には教えていな
い点であったが出題したのであった。一学期の
時点でのことなので、まだ充分には覚えられて
いない生徒も多いだろうとは思いつつも、どれ
だけの生徒に定着しているのかを見てみたい
という思いもあつたのだが、こちらの予想は大
きく裏切られる結果となつた。

傍線部の現代語訳は、「（私があなたの）後ろ
から魚を追ひ入れよう」となるのだが、誤答で
多かったのが、「後ろから魚を追ひ入れませ、」
というものであつた。解答の九割以上がこうい
つたものであつたので、意志の「む」を授業で触
れている程度では正解に至るのは難しかったの

だろうかと思案するとともに、課題への取り組みについて、正解を見るだけではなく解説も読み通しておくことを徹底し、生徒たちの現状分析を丁寧に行うことが教員の課題として意識された。

指導が徹底出来ていないこと、生徒の意欲を喚起するには不十分な指導であったことなど、反省点や修正点についてはある程度明確にできたが、一点指導の改善でどこまで対処できるのか、あるいは対処することに問題はないのかと考えたことがある。それが本稿を書く動機ともなったのだが、正答の「(私があなたの) 後ろから魚を追い入れよう」ではなく、「後ろから魚を追い入れます」という誤答を書いてしまう生徒の言語感覚とどう向きあうべきかということである。

日常的な会話において、「誰かこの仕事をしてくれませんか」などと問いかけた時に、「私がやります」と答えても、文末に意志の助動詞を使わずにイントネーションによって意志のニュアンスを込めることはできる。そのため、このような日常の経験を踏まえれば、考査などにおいて出題される問題が会話のやり取りの内容に関わるものであるのだから、「～ます」という文末表現が完全に間違っているわけではないと言える。イントネーションが不在のために意味が絞きれないことは問題であるが、先のような解答が出されることもおかしくはないだろう。

う。そのため、逐語訳に基づく訳出を明確に要求していないのであれば、「～ます」という文末表現も不可とはしづらい。

昨年の「言語文化」で、「土佐日記」の「帰京」を扱ったときに、「なほ飽かずやあらむ」を口頭で訳出させると、「やはり満足しなかったのだろう」と答えた生徒は、末尾のイントネーションを上げることで「か」の欠落を補っていた。係助詞「や」が疑問であることを説明していたのだが、彼らにとつては声によるイントネーションが文法よりも優先されるということに気づかされた。会話の中であれば、これも許容されるのだろうが、一旦書かれてしまうと、これは疑問とは取れない可能性が高いので、「か」をつけるよう説明したが、日常会話において疑問を示す助詞を使うよりもイントネーションでニュアンスを変えていくことが常態化している現状を確認させられた。

御田寺圭が、LINEのメッセージは若者たちにとつては「会話の一形態」であるのに対して、年長者たちは(中略)手紙やメールの延長上にある『文書送信の一形態』(注)としていると指摘しているが、ここで考えるべきなのはメディアに文字を打ち込むことへの認識の違いよりも、話し言葉に近い認識で生徒たちが書き言葉を使っているということである。そのため「マルハラ」という言葉が生じることに納得してしまうのだが、イントネーションが不在で

も文脈に依存した形で会話のような言葉綴ることへの抵抗感が非常に低くなっていることは確かだろう。だが、これで書き言葉を使つてのコミュニケーションは可能なのだろうか？

そこで、伝わるのが大切だととして、自分の発する言葉が会話においてか、文章においてかという場合分けをしたうえで使い分ける必要性、使い分けを教える必要性を感じている。「ヤバイ」といった、その場を共有している者だけに共有される文脈依存の言葉遣いを日常的に行う生徒たちに対して、これを是としてしまうと他者に自己を開く機会を失うことになるように思われるからである。古文の訳出作業をしていてもなんとなく意味が通じれば問題ないと教わっていた(教えてしまっていた)傾向も感じられることもあり、古語と現代語を対応させていく作業を習慣づけることで、より多くの他者と共有される言葉遣い、特に多くの受け手の理解を得られるような「話す」「書く」指導の必要性を痛感した次第である。

〔注〕

御田寺圭「PRESIDENT Online 中年は知らない：若者がLINEで句読点がついた文を心底嫌悪する本当の理由」(<https://president.jp/articles/-/61340>) 最終閲覧日二〇二四年七月三日

〔参考文献〕

定延利之『文節の文法』(二〇一九年八月 大修館書店)